

令和5年度 宮城県立支援学校女川高等学園
寄宿舎自治会防災記録

想起 ~経験を思い出し、『いつか』の備えに~



1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」表彰式・先衣云 防災力強化県民運動ポスターコンクール表彰式

兵庫県・毎日新聞社・(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構 ひょうご安全の日推進県民会議



1.17防災未来賞
「ぼうさい甲子園」
表彰式

防災力強化県民運動
ポスターコンクール
表彰式

日時
令和5年12月23日(土)

開場/12時30分
開会/13時00分
閉会/16時10分

会場
兵庫県公館 大会議室

完全登録制のため、事前登録のない方は
御入場いただけません



- ①総合防災訓練・各自治会 1
- ②環境整備班 2~3
- ③安全点検班 4
- ④給食給水班 5
- ⑤救護班 6~7
- ⑥総務班 8
- ⑦広報班 9~20

女川町インタビュー活動
~女川町インタビュー東日本大震災から12年・防災について~



～本校の防災の取組について～

自治会活動

女川高等学園は、東日本大震災で大きな被害を受けた女川町にあり、日常生活の中で「もしも災害が起こったらどうするか？」ということで、生徒全員がその考えと向き合うために、『自治会組織』を作り、次の災害があったときに備えて勉強を積み重ねています。



総合防災訓練

総合防災訓練では、私たち生徒が災害にまきこまれる体験や、災害にあって困っている人を助ける体験をします。その体験を通して、災害時に自分のできることや、お互いに助け合うことの大切さを学びます。令和5年度『総合防災訓練』のテーマは「想起」。震災から12年目を迎え、新たな想定を含む様々なリスクに備えるため、防災・減災の観点から各自治会班が取り組みました。

環境整備班

「浸水歩行体験」

「津波や浸水時の避難」

浸水している中を歩く体験です。ペットボトルの中を歩行することで、実際に浸水している中を歩行しているかのような体験ができます。また、タブレット機器の画面を見ることで視覚からも水中を歩いているような感覚を味わいながら、浸水歩行体験ができます。



環境整備班

夜間に浸水した所を歩く体験です。暗くしたステージの中を、タブレット端末に映った浸水のAR(拡張現実)の画面を見ながら歩きます。足元には障害物があり、それを感じながら、夜間に浸水した所を避難することの危険、困難さを体験します。



「浸水歩行体験」

「津波や浸水時の避難」

安全点検班

「防災リュック」

防災リュック作りをする際に、テーマを決め、そのテーマに合う物をグループごとに話し合い、避難に必要な物を準備していきます。



防災リュックのテーマ
「高齢者」「女子高生」
「赤ちゃんのいる家族」

「防災リュックを作ろう」～安全に避難するために必要な備えについて理解を深める～

救護班

応急処置訓練を通して、災害時に起こりうる「骨折」や「熱中症」について、必要な応急処置の知識を深めるために、基本的な処置方法を体験してもらう訓練です。

「応急処置訓練」
～骨折編～



骨折は、専用の器具がなくても身近にあるもので応急処置ができます。例えば、傘、段ボール、木の枝、雑誌、衣服、三角巾、スカーフ、ゴムバンドなど

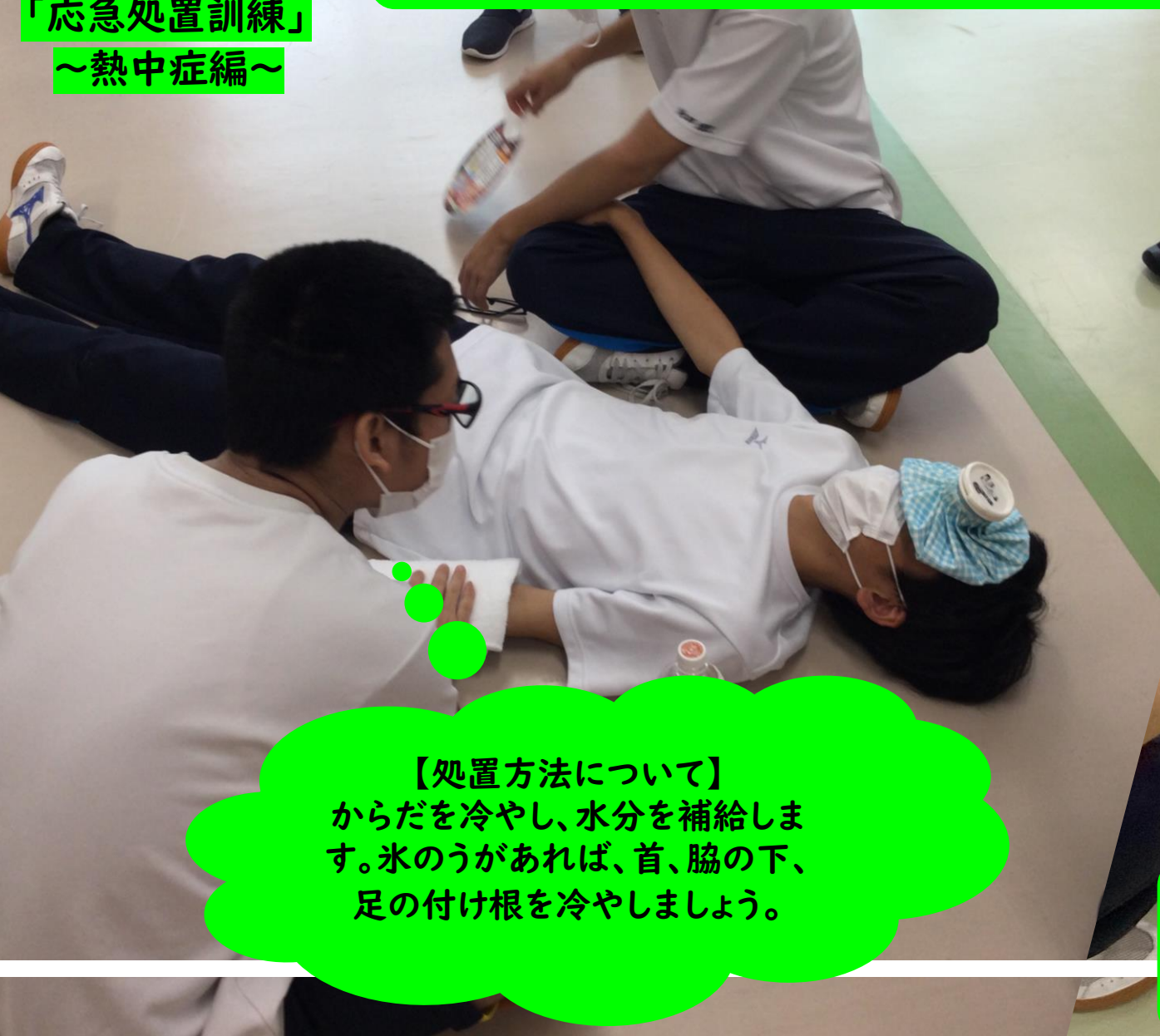
骨折には種類があり、「腫れがあるか」「色が変わっているか」などで見分けることができます。

救護班

「応急処置訓練」

～熱中症編～

気温や湿度が高い時期に体調が悪い人を見かけた時は、熱中症を疑います。



【処置方法について】
からだを冷やし、水分を補給します。氷のうがあれば、首、脇の下、足の付け根を冷やしましょう。



飲める場合は、水分・塩分を補給します。スポーツドリンクや経口補水液が効果的です。

給食給水班

炊き出しの仕組みを知り、調理・配付場所の設営、配食を行い、災害発生時の水分補給と食事について体験します。

「炊き出し食提供」

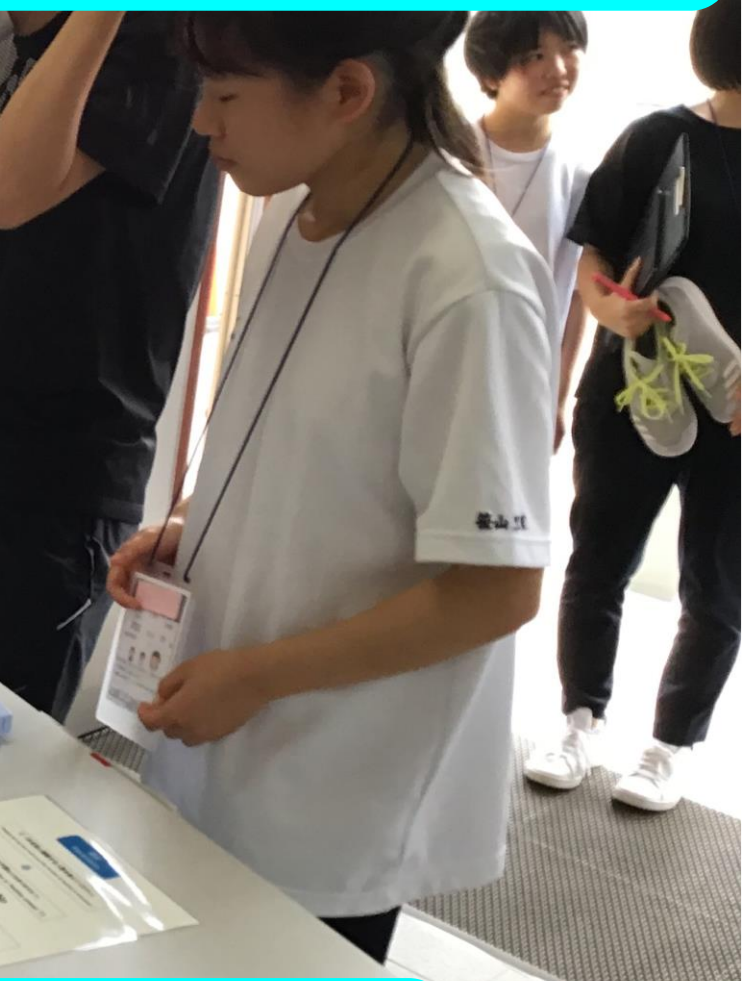


炊き出しのメニューは、「豚汁」。その他、「アルファ米」「のり」「ふりかけ」「飲み物」「非常用のお菓子」
110人分を給食給水班のメンバーで配食しました。

総務班

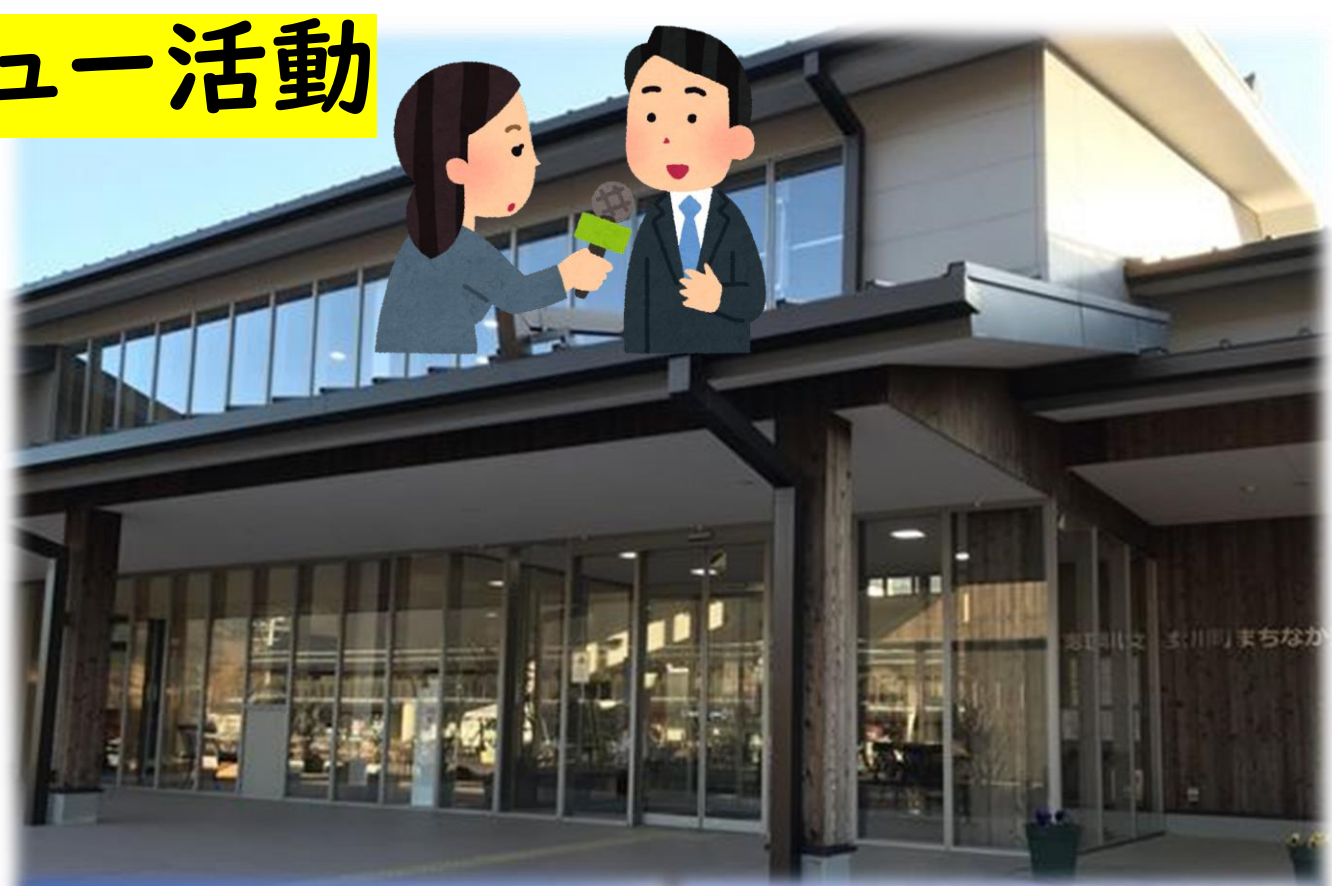
「避難所運営訓練」

災害が起こった場合に、様々な困りごとをもった人が集まるのが避難所です。実際の避難所を想定し、様々な年齢層や家庭、体調不良者などを受け入れる際の対応を避難者と運営側に分かれて学び合う訓練です。

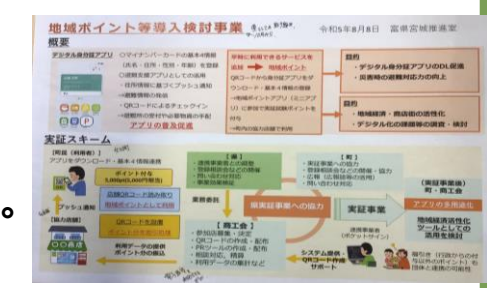


避難所を利用している人たちは、それぞれに違う環境があります。互いに助け合うことが必要になります。避難者だけでなく運営側も被災者であることも多く、それぞれの大変さを体験することが目的となります。

令和5年 女川町インタビュー活動



令和5年 女川町インタビュー活動



女川町まちなか交流館

Q：震災で町が被害に遭って、どんなことが不安でしたか？

A：町内の把握、がれきの撤去、この街がどうなっていくのかという不安。本当にいろいろなことが不明確で不安でした。

Q：女川の街が復興した時は、どんな気持ちでしたか？これからこの街で、何かやってみたいことはありますか？

A：街は綺麗になったが、ソフト面での整備を進めています。そのひとつとして、「地域ポイント等 導入検討事業」→写真を参照下さい。

Q：震災前と震災後の景色はどちらが綺麗ですか？

A：今は新しい建物が多く、綺麗に整備されていて素敵な場所になりましたが、震災前の味がある雰囲気も良かったです。

Q：なぜこの場所に建物を建てたのですか？また、この建物には防災の対策がありますか？

A：平成27年12月7日に開館しました。まちなか交流館を利用した人に、お店（道の駅『シーパルピア』）を利用してもらおうと建てられました。防災対策としては、火災報知機、担架、車椅子、水などを備蓄しています。

Q：もしも震災が来たと想定して避難する時の準備物を教えてください。

A：防災用具を使用して、年1度の避難訓練を実施しています。

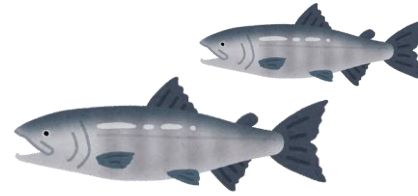
Q：震災後の復興したこの街の人々（施設を利用する方々）に言われて嬉しかったことや役に立てて良かったことや、まちなか交流館様の施設の役割について今後の方針などがあれば教えてください。

A：今後も、イベントなどを通して、いろいろな人が集まって活動できるコミュニティ、を目指したい。震災前にあった「交流館」のようところが、また出来て嬉しい、という言葉も聞けたので、今後もたくさんの人に利用してもらいたいです。

令和5年 女川町インタビュー活動

女川町水産業体験

(あがいんステーション)



Q: どういう経緯でこちらのお店はオープンしたのですか？

A: 震災で女川町内の水産業やお店が壊滅的被害を受けて、混乱していました。会社一つ一つが作ることができなくなり、販路を作るのも大変でした。お店がすべてなくなってしまい、来てくれた方がどこで買い物をしたらいいのかわからない状態でした。いろんな会社の社長さんたちが一つの会社を作り、「あがいん女川」というブランド品を立ち上げて、一人一人の個々の力より、みんなで力を合わせて大きいものにして販路拡大や観光客に対してアピールをしていきたいと思います。なので、震災後にできた会社になります。

Q: 女川の特産物などがあると思うのですが、どのような商品を販売しているのですか？

A: 女川の名産である「ほや」、「さんま」、「銀鮭（養殖）」、「ほたて」など各社が作っているものを私たちが仕入れて、一か所でまとめてお土産として買い物ができるようにしています。

Q: それぞれの商品を置いている理由などありましたら教えてください。

A: 震災後、人が来てくれるような状況ではなくなったが、来てくれた人に女川町に行ってきたよというお土産品をまず得ること、簡単に外に出ていけないので、商品を通信販売や電話注文で注文いただいた商品を外に送ることで、女川町のことを発信できるので、そういった意味でも地元の商品を大切に売っています。

令和5年 女川町インタビュー活動

女川町水産業体験（あがいんステーション）



Q:おすすめの商品はなんですか？

A:海産物…といきたいところですが、商店街でたくさん売っているので、お土産品に適したお菓子やせんべい、コーヒーを売っています。コーヒーは、うちのお店で企画して、アイデアを出して販売しています。作ってもらっているのは石巻のコーヒー屋さんです。せんべいは“オランダせんべい”で有名な山形県の坂田米菓さんで作ってもらっていて、女川町のマスコットキャラクターであるシーパルちゃんを絵柄でつけて販売しています。ほや醤油やわかめ、海苔など産地の物を使っておせんべいを作ってもらって、あがいんステーション限定で販売しています。コーヒーはパッケージを女川町ならではのものにしています。

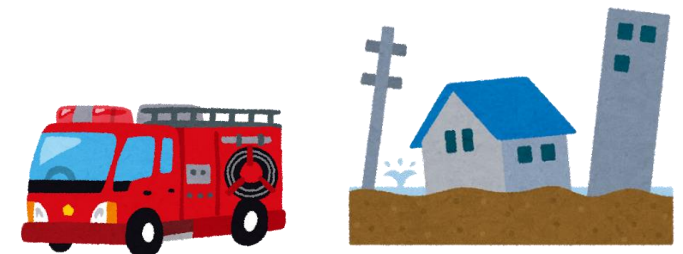
Q:震災の時、どういった状況でしたか？

（ご自身の体験でも構いません。）

A:当時は石巻市の100円ショップで仕事をしていました。お昼が終わって落ち着いた時間帯に地震があり、1人だったのですが、電気が消えて、重い冷凍庫が倒れて大変でした。店は道路に面していたのですが、すぐに津波警報を知らせる消防車が道を逆走していったので、津波がくるということがわかったのですが、防災無線は聞こえませんでした。その一台の消防車のおかげで私はすぐに逃げました。その時は気付いていませんでしたが、今にして思えば結構海が近かったので、ギリギリ逃げて直後に津波が襲い、私がいた店も流されてしまいました。命からがら逃げましたが、一台の消防車に私は助けられました。その後、雪が降る中、パーカー一枚でずっと外にいましたけど、人ってなかなか風邪をひかないんだと思いました。それだけ緊張していたのかもしれませんが。朝まで外にいましたが風邪をひくことはありませんでした。3日目か4日目に自宅に帰ることができましたが、それまでは避難所にいました。

Q:震災後も大きな地震等ありましたが、被害はありましたか？

A:建物自体は大丈夫でしたが、お酒などの商品が落ちて、かなり損失はありました。



令和5年 女川町インタビュー活動

女川町水産業体験 (あがいんステーション)



Q:コロナが5類になったことで、観光客も増えてきたと思います。どんな災害対策をしているのですか？

A:そもそもの造りとして、商店街やその界隈が、災害があったらすぐに高台に逃げられるように設計されています。商店街のレンガ道も避難経路として十分な幅をとってあります。もし津波警報が出たら、河口から役場が見えるので、慌てずに、そこに向かって避難するようわかりやすく説明するようにしています。

Q:特に、地震津波に対する備えや対策はありますか？

A:「こういう状況になったら、こう行動する」ということを、スタッフ同士でも同じ意識で常にこうしてくださいという確認をしています。一回確認しただけではどうしても忘れてしまいますし、「いつも確認する」、「何度も確認する」ということが大事で、その時大丈夫と思っても、とっさに行動できないので、何度も何度も、『何カ月に一回』などと決めて確認しています。また、エリア全体で避難訓練を一年に一回行っているのので、それに積極的に参加して、改めて意識を高めています。

Q:震災後、復興を感じる瞬間はどんな時ですか？

A:「ここで災害があったんだよ」ということが当たり前の中にあるというか、常に頭の中に避難することや避難経路のことを意識しています。それが当たり前になっていることが、復興したんだなと感じます。意識的に街並みがきれいになったとか特別なことではなく、何か災害があった時に当たり前それが頭の中にあることが、いつも通りにもどったんだなということになる。「災害が身近にある」、それが当たり前だという意識になった時が“復興したかな”と私は思います。



令和5年 女川町インタビュー活動

みなとまちセラミカ工房



Q:お店ができたのはいつですか？

A:タイルを作り始めたのは、2012年6月です。NPO法人として法人化したのは2013年4月1日です。

Q“スペインタイル”とはどういうものですか？

A:名前の通りスペイン発祥のタイルで、色の鮮やかさが特徴です。装飾性にも富んでいて、建物の外壁や屋内の装飾などに使われています。公園やレストランなど、町中のいろんなところに使われています。

Q:“セラミカ工房”の名前の由来を教えてください。

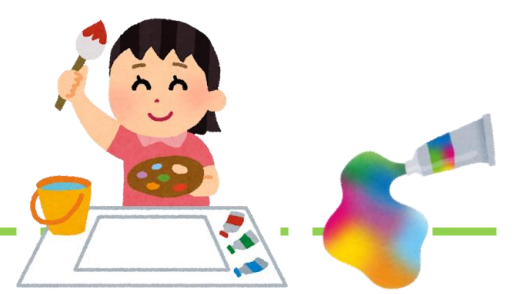
A:“セラミカ”とはスペイン語で“陶器などの窯で焼き上げる物全般のこと”を指します。

震災前から趣味で陶芸をしていて、その関係でタイルを紹介され、震災後にタイルを作り始めていて、どちらにも“セラミカ”というつながりがあるので、名前を付ける上で欠かせないと思い、名付けました。

Q:スペインタイルを始めたきっかけはなんですか？

A:震災前に趣味で仲間とサークル活動のように陶芸を楽しんでいましたが、津波ですべてダメになってしまい、震災後に趣味を再びやりたいと思った時に、スペインタイルと出会いました。震災1年後に実際にスペインに行き、町中にある現地のタイルを見てとても感動しました。女川の町は震災の津波で町の8割が流されて、ほとんどゼロの状態から町づくりが始まっていく時に、このタイルで町を明るく彩っていきたいと思ったのがきっかけです。

令和5年 女川町インタビュー活動



みなとまちセラミカ工房

Q: スペインタイルを作る上でコツはありますか？

A: 色分けするためのシャープペンの線に沿って色付けをする釉薬（ゆうやく）をスポイトを使って流していくんですが、その作業をする時に線描きがとても大事になってくるので、線をはっきり濃く描くと、色付けの作業がすごくやりやすくなり、仕上がりが良くなります。また、粉と液体を混ぜて釉薬を作る際に、釉薬の濃さ（濃度）を均一にすることもコツです。

Q: どんな思いで作品作りをしていますか？

A: そもそもタイル作りの始まりが、“町を明るくしたい、元気にしたい”という思いで始めました。女川の町に来た人がタイルを見て元気になってもらいたいです。お店のタイルを商品として買ってくれた時も、うちでそれを見た時に女川のことを思い出してワクワクしたり、明るい気持ちになってくれたらいいなと思って作っています。

Q: お客様が楽しめるように、どのようなことを意識していますか？

A: ここは商品の販売だけでなく、“体験”もできるんです。製作体験を通して、スペインタイルの魅力を伝えたいし、お客様が作る楽しみ・喜びを味わってもらいたいと思っています。商品に関しては、女川に来てくれる度にお店に来てくれるリピーターのお客様も多いので、常に新しい柄や季節の絵柄などを追加して、喜んでもらえるようにしています。

Q: お店や活動を立ち上げるにあたり、一番苦労したことはありますか？

A: 全部苦労しました(笑)ゼロからのスタート、何もないところからタイル作りを始めて、技術だって最初からこんなにきれいにできたわけではなかったの。技術を身につけるために東京の教室に勉強に行ったんですが、そこに行くための資金を工面するのも苦労しました。資金集めと技術を身につけることが大変でした。

令和5年 女川町インタビュー活動

みなとまちセラミカ工房



Q: 女性だけで活動していると聞きました。なぜ女性だけで活動しているのですか？

A: 最初は陶芸仲間の6名で始めたんですが、その仲間がたまたま全員女性でした。その後に興味を持ってきてくれた人や、前の職場で一緒だった人など、集まった人達がたまたま全員女性でした。仕事の内容も女性に向いているのかなと思います。細かい作業であったり、物作りであったり。また、自分の空いている時間で、楽しみながら仕事ができるので、女性にとって働きやすい環境かもしれません。ただ、男性を拒否しているわけではありません(笑)全然男性もオッケーです。

Q: 今後のお店や活動の目標はありますか？

A: 今、メモリアルワークショップと言いまして、お客さんが体験してくださる時に、タイルを2枚作ってもらっています。1枚は自分用、もう1枚は町に飾るタイルとして寄付していただいて、町に飾らせてもらっています。大勢の皆さんに町を彩る“メモリアルタイル”を作ってもらいたいし、たくさんの方の協力で町を明るくしていきたいです。町に飾られたタイルはずっと残るので、メモリアルタイルを通して、女川と協力してくれた人、ご縁のあった人をつないでいくことができるといいなと思います。また、それをずっと長く続けていきたいというのが一番の目標です。

Q: 震災時に一番苦労したことはなんですか？

A: 情報がなかなか伝わってこなくて、大変でした。今何が起きているのかもわからない、どこに行ったらどういう物資がもらえるのかもよくわからないということがありました。携帯電話もありましたが充電はできないし、移動したくても車が流されて移動手段がない、車があったとしてもガソリンが買えなくて大変困りました。一番は情報が入ってこなかったことかな。連絡を取る手段がなく、電話をかけてもつながらない、家族の安否を確認したくても電話もつながらないので歩いて探すしかありませんでした。食べる物はなくてもなんとかあったし、着る物もその日に着ていた物を取りあえず着ていればなんとかあったし、そのうちに物資も届き、寝るところだって雨の当たらない所に避難できたので…。

令和5年 女川町インタビュー活動

みなとまちセラミカ工房



Q:震災を通して、今後どんな活動をしていきますか？

A:私の場合は、お店をもつことで自分が経験したことをお客さんに伝えることができるので、“自分が経験したことを誰かに伝える”ということがすごく大事なかなと思います。それ以前に自分や家族の身を守るということももちろん大事ですが、大変な経験をした者としては、それを語り継いでいくことが大切だと思います。

Q:今後、女川町が豊かになるためにどうなるとより良いと思いますか？その中で、どんなことができると思いますか？

A:“住んでいる人が日々の暮らしを楽しんでいること”が一番豊かなことなのかなと思います。毎日暮らしていれば不便なことや大変なこともあります。そんな中でも自分の暮らしを楽しむ。自分が楽しんでいけば、それを人に伝えられるし、共有できるし、楽しい事を探そうとも思うし。自分が楽しむということがいいのかなと思います。そして、それを女川の魅力として外に発信するというのも大事だと思います。外の人に女川に興味を持ってもらう、『女川がそんなに楽しい町なら行ってみよう』とか思ってもらえるような、“自分たちが楽しんでいることを外の人たちに知ってもらう努力”はした方がいいのかなと思っています。今はSNSとかもありますし。日本全国どころか、世界中の人達が見ているので、伝えられればいいのかなと思います。



令和5年 女川町インタビュー活動

Swimmy Inn Onagawa



Q:この場所に宿泊施設を建設した理由を教えてください。

A:震災前と震災後をと比べ、宿泊施設が3分の1程度になり、女川町に宿泊施設の需要が必要となっていました。役割を担うために、建設しました。また、女川町にある企業5社で共同経営をし、資金源の確保（漁獲量などの取れ高に左右されることなく）をするためでもあります。

Q:この町や宿泊施設の魅力を教えてください

A:長期の方が名前を覚えてもらえることが嬉しいです。また、宿泊施設で提供している食事も手作りやなるべく国産のものなどにこだわっているところや宿泊を利用する方々へのプランも幅広いものにしています。（例えば、家族向け、スポーツで団体が合宿できるものやバリアフリーなどにも対応できるようにしています。）また、コンビニやスーパーなども近くにあるところも魅力の一つです。

Q:これまでにこちらの施設を利用される方はどのような方（観光目的や復興支援など）ですか？また、施設の利用に関して、どのような方々におすすめですか？

A:長期の方々。（女川町で働く方々）、スポーツ団体で利用される方々。観光目的での需要もあります。

Q:今後の災害の備えや対策を教えてください

A:マニュアルを見直しています。

文章などにし、消化器やAEDの場所なども地図に示し、全職員で共有できるように作成しています。



Q:私たち女川高等学園の生徒が女川町に役立つために、必要なことや役割など求めたい姿がありましたら教えてください。

A:女川町で働くことや居住することをおすすめしたいです。（自分自身が中学まで、女川町で過ごし、高校・大学は女川町を出たが、今はまた女川町ではたらくことができている。もっと若い人が増えたらと思っている。）

令和5年 女川町インタビュー活動

女川町役場



Q:震災当時の観光客の避難の仕方や、過ごし方を教えてください。

A:閑散期でした。来館者は、1名。当時のマリパルの業務にあっていたスタッフは、地震発生後に施設点検し、来館者にはすぐにお帰りいただいた。自主的に避難という指示はしなかったです。(おそらく、帰られたと思う。)

マリパル女川(シーパル1)という建物は、東日本大震災前にあった建物。女川町の成り立ちなどを兼ねた資料館だった。マリパル女川(シーパル2)という建物が、お魚屋さんが数件入っていた。(高政さんなど)お魚屋さんのテナント。2階がレストラン。震災時、マリパルの屋根の上まで津波がきた。

マリパルは震災前、観光客は少なく、女川総合運動場(女川)が多かったです。(さまざまなスポーツの大会が催された。)震災時も女川総合運動場で催しがありました。観光客もいたので、呼び止めました。女川総合運動場は、避難場所・避難所とどちらもかねていたため、その場にいた方を留まらせ、最後までいてもらいました。

Q:震災前と後で災害に対して変わった対応はありますか？

A:震災の起きる年(2011年)に、マリパルで働いている方と協力して書面を作りましょう(防災関連)と話をしていたところで東日本大震災が起こりました。

観光分野東日本大震災を起点として、国の防災について、法令が変わりました。災害をレベル分けし、そのレベルに合わせた対応を考えないといけないことになりました。東日本大震災を経て防災に対する対応が大きく変わりました。町として教訓として、地域防災計画も整えました。風水害、地震災害、津波災害、原子力災害、東日本大震災よりも大きな災害を想定として計画をしています。防災を考えなければならないです。BPO(注釈1)業務を継続しなければならないです。例えば、災害が起こっても役場を利用したい人がいます。災害があった場合その対応をするために計画を考えなければならないです。

注釈1 BPOについて:ビジネス・プロセス・アウトソーシングの略で、業務プロセスの一部を専門的な外部企業に委託する手法です。「業務委託」という言葉を使うこともあります。部署が担当している業務をまるごと委託する場合のほか、業務のフローの見直しや、最適な人材の配置プランなど、業務の効率化に向けた改善ポイントを提案してもらう場合もあります

令和5年 女川町インタビュー活動

女川町役場



Q:観光客が女川町で災害に遭った時にどのように観光客を守る体制をとっていますか？

A、年に一回防災訓練を行っています。シーパルピアや震災遺構を観光客が見ている際に、津波警報が発令された想定で、行政、消防、産業区が参加し行っています。観光客役として役場職員が参加した際に、走って逃げた場合、歩いて逃げた場合と色々な想定をして毎年行っています。可能であれば、学校のみなさんにも参加していただけると、さまざまな想定を考えることができる材料となります。地域で協力し合いながらできるので良いです。観光客、女川町産業の観点から産業区という行政区をつくっています。産業区の避難訓練の内容が商店街の場所で観光客が来ているという想定で、観光客にどのように声をかけ、どのルートを通らせて避難させるかという訓練を商店街の方々が自主的に行っています。令和元年から取り組んでいます。平成31年度に、電柱に避難誘導を貼り、それを見ればどこに逃げたらいいのかわかるようにしました。標識を作って、観光客の人が見てわかるものを整備しました。

Q:もし大きな地震があった時に観光客をどうやって避難場所に誘導しますか？

A、一つ目は、防災広報無線です。町として避難を誘導しています。二つ目は、Jアラートが自動発報するように設定しています。(地震が震度4以上、津波注意報が発令)機械音声が流れます。三つ目は、ツイッターの活用。町内の冠水場所や土砂崩れなどの情報をあげます。また、テレビの放送では「みどり」というシステム活用しています。宮城県の防災を伝えるシステムであり、テレビを見ることで、町の防災無線以外にも情報を把握できるようになっています。避難誘導の結果や避難所開設の情報などが流れます。各報道機関も情報を入手できます。宮城県全体でも情報把握。総務省、国でも情報を把握することができます。NHKとも連携し、10秒後に情報反映(dボタン)し、ラジオでも同じように情報を取得することができます。また、防災アプリの「みどり」と連携し、「ヤフー防災」や「ネルフ」などがあります。大きなところで、町独自の呼びかけ(防災無線)、オンラインでの呼びかけ、報道を使った呼びかけを活用しています。

令和5年 女川町インタビュー活動

女川町役場



Q: 観光客に、災害について備えてほしいことはなんですか？

A、自分の命を守る方法をとって下さい。と呼びかけています。祭を行う際に、計画を出しています。(災害への備えをどのように周知させるかを計画書にまとめています。)計画書には、「緊急避難行動計画」を作成し、来場者の避難体制を確立する。そのことを警察の人たち消防の人たちにお知らせしています。その中に、自主避難体制や災害の程度によって本部が取るべき行動を示し、中止するべき時はどの場合か、また、実際に災害が起こった場合に避難誘導はどこに誘導するのかなどを警察・消防の方々や町の人たちと周知し、一緒にやっています。

Q: 観光客を増やすために商業施設を建設する予定はありますか？

A、今のところないです。観光客誘致に関しては、震災からの復興計画が決まっていて、シーパルピアのレンガ作りの商業施設となっています。これ以上の建設はないです。

Q: 女川町の観光名所をおしえてください。

A、道の駅女川です。このあたり一帯を観光名所のエリアとしています。道の駅としてエリアでの登録は、全国でも珍しく、観光のほとんどがこのエリアでまかなうことができます。あとは、海釣りなどです。

